

イエスは「目を覚ましていなさい」と言われます。「その時がいつなのか、あなたがたには分からないからである」と。「その時」とは、イエスの再臨の時のことです。即ち、神が救いを成し遂げられる時がいつ来るか分からないから、諦めずに待っていなさいとイエスは言われるのでした。

しかし一方で、「目を覚ましていなさい」と3度も告げなければならない程、弟子達がとても目を覚ましてなどいられない状況に立たされていく未来をも展望しています。13章では、戦争、地震、飢饉、家族の殺し合いなど、今日でも見られるような不条理な出来事の生起が示唆されています。また、イエスは、当時のユダヤ社会の権威の象徴であった堅固なエルサレム神殿でさえ崩れ去っていくことを、それに見惚れていた弟子に対して予見するのです（13:1～2）。いつ不条理な出来事が襲いかかり、私達の作り出した夢や希望を打ち崩していくか分からない…そんな現実が示唆されています。しかしイエスは言われます。「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」（13:30）と。

「木を植えた男」という絵本があります。不毛の地で、誰にも知られることなく、何年も種を植え続けた一人の男。芽が出ない年、周囲で戦争が繰り返された年にも、種は植え続けられました。虚しさや絶望と戦いつつ…。そして、その地道な行いはやがて、彼の知るところ知らぬところで、たくさんの自然や動物の命を生み、人間を養う環境にまで育っていきます。このような人物の在り様に心打たれた作家ジャン・ジオノは、それを書き残しました。そして、その原作に魅了された画家フレデリック・バックが絵本に描き起こしたことで、世界中に知れ渡ることとなりました。すると今度は、この絵本に救われる大勢の人が生まれます。日本では、映画監督の宮崎駿さんやピアニストの西村由紀江さん等、絵を描き、ピアノを弾くことに立ち止まっていた二人を救い出しました。そして、そのお二人の作品や音楽に大勢の人が救われてきたに違いありません。一人の「木を植えた男」から、救いの物語が広がっていったのです。

イエスは逮捕され十字架につけられる前夜、ひどく恐れもだえ始めます。そして、できることならこの苦しみの時が過ぎ去るようにと願いつつ、「しかし、御心に適うことが行われますように」と祈られ、その姿を「目を覚まして」見ているようにと弟子達に言われるのでした（14:32～）。私達は知っています。そのイエスの死が、決して無駄に終わらず、数々の愛と平和を今日まで成し遂げてきた歴史を。

「その日、その時は、だれも知らない」とイエスは言われます。不条理な現実を見聞きする時代だからこそ、このアドヴェントの時、神が救いを成し遂げてくださる「その日、その時」を、目を覚まして待ち望む信仰と希望とを新たにしていきたいと願います。「隣人を自分のように愛しなさい」（12:31）と主イエスが私達に「割り当てられた仕事を、諦めずに、一つひとつ積み重ねながら…。

（文責：望月達朗牧師）

